

# 夫婦間の勢力関係が子どもとの関係に及ぼす影響

## —ジェンダー意識の視点から—

矢野裕子

(京都西山短期大学)

### 【要旨】

本稿の目的は、①夫婦間の勢力関係と、ジェンダー意識、性生活満足度や夫婦関係全体満足度との関連があるかを分析すること、②その夫婦間の勢力関係が両親の子どもとの関わりに影響を及ぼすかどうかに関する探索的分析を行うことである。

分析の結果、特に次のことがわかった。女性回答者については、性別役割分業に消極的な考えの女性ほど性生活に不満足で、夫婦関係全体に満足している女性ほど、家計の問題についての勢力が弱い。男性回答者については、ジェンダー意識の弱い男性ほど、家計の問題についての勢力が弱く、性生活に不満足な男性ほど、教育方針や家事についての勢力が弱かった。虐待傾向は、①性生活の不満足度よりも、勢力が弱い人や夫婦関係全体に不満足の人に、虐待リスクがあること、②子どもによく話かける、子どもの気持ちや考えを理解するなど、子どもと良好な関わりをするかどうかは、夫婦の勢力関係や夫婦関係全体の満足度が統計的に有意に影響することが示唆された。

キーワード：夫婦間勢力、ジェンダー意識、子どもとの関わり

## 1. 問題意識

昨今では、子に対する関わり方や虐待的傾向と夫婦関係との関連を扱った研究も増えてきた。子の心理的健康などに影響する要因として今後重視されるべきなのは、親子間の相互作用以上に夫婦関係に代表されるような家族変数であるという指摘もあるように (Cummings,他 2006) 重要視したい。夫婦間の不可視的権力の作用においてジェンダー・イデオロギーの規定効果を示した Komter (1989) が提起した「水面下の権力プロセス」に着目する三つの権力概念分析枠組みは、その後のフェミニズムの視点での夫婦の勢力関係の分析に大きな影響を与えた。そして、フェミニズムからは、子ども虐待の加害者である母親は DV 被害者であることも多いことが指摘されてきた。

DV が起こる原因は、過去の暴力体験のトラウマなど個人的性質という見解もある一方で、コーネルのように夫婦間の勢力関係という見解もある。そして、夫婦間の勢力関係、引いては家族内の勢力関係は、社会の支配被支配の構造の縮図であるとの見方もある。社会の支配被支配のイデオロギーは、個々の人間の身体に内面化されている。

夫婦の勢力関係と性関係について言及された研究に関連して、文化人類学の立場からは、メイヤスーが、モノ化されてきたのは女ではなく女の再生産力であると示唆する (ラーナー 1996)。女性支配の究極の方法は、女性の性支配ともいえ、ラーナー (1996) によると、例えば、性の二重規範は紀元前 6 世紀、5 世紀のアテネでも慣行であったことが示されている。女性には結婚前と結婚後の貞操が強制されたが、夫たちは自由に婚姻外で性的満足を得ることができたという。これは、世界のあらゆるところで起こってきたことでもあり、日本でも同様

に、性の二重規範という社会規範があったことは言うまでもない。つまりは、長い間、性的満足は男性のものであるという価値観が女性を抑圧し、女性らは、ジェンダー規範を内面化し、ジェンダー意識を再生産し続けてきた側面もある。

そこで本報告では、まず、ジェンダー意識の視点から、夫婦間の勢力関係に家族観（家族についての考え方）が及ぼす影響について分析をしていきたい。結婚生活における満足度と合わせて分析することにより、回答者本人の夫婦間の勢力関係の受容度が見えてくると期待できる。さらに、夫婦間の勢力関係が親子関係に影響を及ぼすかについても検討する。

## 2. 先行研究

### 2.1 夫婦関係と子どもとの関わり

夫婦関係の悪化は母親の虐待行動に影響を及ぼし、親役割から生じる母親の育児ストレスと関連することも示されている（中板 2012; 高橋 2007）ように、夫婦関係は子どもの養育態度に影響をもたらすことが共通理解となってきた。

NFRJ03 を用いて分析を行った永井（2006）の研究では、家族が抱える生活問題、夫婦関係などに焦点をあて、それらと子どもへの虐待傾向との関連の有無について分析している。永井（2006）によると、配偶者の健康状態は、女性回答者には関連が見られ、男性回答者にはみられず、夫の健康状態が悪いと妻は子どもへの虐待傾向が高くなるという結果を得ている。生活満足度も女性では虐待傾向との間に有意な関係があるが、男性の場合にはそういった関係はないが、夫婦関係は男女ともに虐待傾向と有意な関連がみられるという結果を得ている。また、性別役割分業の中で男女それぞれに課されている負担や、役割ストレスは男女ともに虐待と結びついていて、役割ストレスの値が高いほど虐待傾向が強く、弱い立場にある子どもに向けられていることが示唆されている。さらに、夫婦関係満足度と養育態度について、親の養育態度に影響を及ぼす要因に関して、女性は、子どもや家族のことで悩んだり、家族から理解されていない、家族内での負担が重いほど、夫からの情緒的サポートが少ないほど、夫婦関係満足度が低いほど虐待傾向が強いことも示唆されている（永井 2006）。

夫婦関係と親の養育態度に関する堀口（2006）の研究では、身体的マルトリートメントにあたる体罰・拘束を伴うしつけについては、夫婦関係の良し悪しには有意な関連がなく、最も関連があったのは子どもの人数、次に親の学歴であることが示唆されている。しかし、夫婦関係満足度は、心理的マルトリートメントにつながりやすい養育態度の側面に、有意な効果を示していることも報告されている。

夫婦関係満足度については、母親が父親より満足度が低いことは定説になっている。母親の労働形態にかかわらず、いずれも期待充足度が高いほど、母親の夫婦関係満足度は高いということが分析されている（李 2008）。

近年（少なくとも 1998 年以降）は、夫と比較した際の妻の学歴は夫の夫婦関係満足度と関連しないが、収入に関しては、夫と比較した際の高低にかかわらず、妻に収入がある方が夫の夫婦関係満足度が低い（永瀬 2015）という研究がある。

結婚生活満足度に関する研究をレビューした木下（2004）は、健康状態、収入、学歴などが、結婚満足度と関連があるとする研究も、関連がないとする研究もあれば、夫の家事・育児の遂行、情緒的サポートなど夫婦の役割分担や相互作用が結婚満足度と関連があるとする研究も、

関連がないとする研究もあるとまとめる。

## 2.2 ジェンダー意識と夫婦間勢力

フェミニズムのアプローチでは、夫婦間権力の視座から研究がなされてきた。今回の分析は、夫婦間権力を夫婦の勢力関係と、ほぼ同義に扱いたい。権力という概念はもともと社会学などの分野で議論され、資源理論や交換理論を経て、権力を関係として捉え直す視点（権力関係構築の過程に注目）に発展していく。Komter（1989）は、権力を「他人の情緒、態度、認識あるいは行動に意識的、無意識的に影響を及ぼす能力」と定義し、既述したように、不可視的権力の作用においてジェンダー・イデオロギーの規定効果を示し、「水面下の権力プロセス」に着目し、三つの権力概念分析枠組みを提起した。Komter の研究を受けて、善積・高橋（2000）が日本では潜在的権力と不可視的権力の働きが多く、役割分担が女性に偏っていることや、家事の最終責任は妻にあるという考え方が支配的で、不可視的権力の作用がほとんどであることを指摘している。善積と高橋（2000）の整理では、夫婦間の勢力をめぐる研究は長年二つの課題を中心に展開されてきた。一つは夫婦間の勢力を操作可能な形に概念化して測定すること、もう一つは権力関係がどのような要因に影響されているのかを明らかにすることである。

最近では、「互いの情緒、態度、認識、あるいは行動に意識的、無意識的に影響を及ぼす力と、その積み重ねによって形成されていく夫婦関係の傾向（孫 2017）」と定義し、夫婦間の意志決定についてのプロセスに関する研究もある。

妻のジェンダー意識については、「男は仕事、女は家庭」という考えに反対の妻では、夫の家事参加は妻の夫婦関係満足度を高めるが、この考えに賛成の妻では、そのような関連はみられないという報告がある（Greenstein 1996; 末盛 1999）。松本（2006）は、男性の家計負担率によって、彼らの家事・育児や家庭内におけるジェンダー意識、夫婦関係満足度が異なることを明らかにしている。即ち、夫の家計負担率が低いと、夫は家事や育児を多く遂行する傾向があり、家庭内でのジェンダー意識が低く、妻の家事と育児への評価が低いこと、夫の家計負担率が高いと、夫は家庭内でのジェンダー意識が高く、妻の家事と育児への評価が高いこと、夫の結婚満足度は、家計負担率が 70%未満カテゴリーで有意に低いことを明らかにしている。

## 3. 課題と目的

本報告では、まずジェンダー意識の視点から夫婦間の勢力関係に、家族観（家族についての考え方）が及ぼす影響について分析する。伝統的性別役割分業意識と 3 歳児神話への意識、高齢の親の扶養や介護の責任感、結婚制度への意識などの家族観をみることによって、回答者のジェンダー意識を捉えることができると思われる。ジェンダー意識を把握することによって、回答者本人の夫婦間の勢力関係の受容度やジェンダーの再生産度などが理解されけると期待できる。

そして、「夫婦の勢力関係」とその状態に対する満足度を測定した結婚生活満足度と、さらに、両親の子どもとの関わり方との関連を検討したい。暫定的仮説としては、①夫婦の勢力関係で弱い親ほど、自分より弱い立場の子どもに対して勢力を持ち虐待のリスクも高まる、②夫婦関係の満足度が高い親ほど、子どもとの関わりも良好である、③夫婦の勢力関係で弱い

女性のなかで、夫婦関係の不満が少ない女性ほど、ジェンダー規範を身につけていると考えられるなどが挙げられる。

以上から、本報告では、NFRJ18 データを用いて、夫婦間の勢力関係と性生活満足度や夫婦関係全体満足度、ジェンダー意識との関連があるか、その勢力関係や結婚生活満足度が子どもとの関わりに影響を及ぼすかどうかに関する探索的分析を行うことを目的とした。

## 4. 夫婦間の勢力関係とジェンダー意識

### 4.1 分析方法と分析に用いる変数

NFRJ18 ver.2.0 のデータを用いて、分析対象を若年層（28～47 歳）のうち子を持つふたり親について、女性回答者、男性回答者に分けて、重回帰分析を行なった。

①従属変数に夫婦間勢力の 3 つの指標を用い、即ち、「子どもへの接し方や教育方針について」「家事のやり方や分担について」「お金の使い方など家計の問題について」の指標を用いた。1(自分の意見)～5(配偶者の意見)のスケールを用い、6(そのような問題が起こる機会はない)は省いた。

②コントロール変数として、「性生活満足度」と「夫婦関係全体満足度」を、数字は逆転させず「性生活不満足度」と「夫婦関係全体不満足度」として用いた。

③独立変数として、家族観について聞いた 13 の指標を用いた。即ち、家族観(ア)「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである(男性は外、女性は家庭)」(イ)「子どもが 3 歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念すべきだ(子どもが 3 歳までは専業主婦)」(ウ)「家族を経済的に養うのは男性の役割だ(家族を養うのは男性の役割)」(エ)「夫婦は、お互いの同意があれば、入籍しなくてもかまわない(事実婚)」(オ)「結婚しても、必ずしも子どもをもつ必要はない(子どもなし夫婦でもよい)」(カ)「結婚しても、相手に満足できないときは離婚すればよい(離婚してもよい)」(キ)「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ(高齢の親との同居)」(ク)「年をとって収入がなくなった親を扶養するのは、子どもの責任だ(高齢の無収入の親の扶養)」(ケ)「親が寝たきりなどになった時、子どもが介護するのは当たり前のことだ(寝たきりの親の介護)」(コ)「婚姻届けを出していないカップルでも、子どもを産んだり育てたりしてかまわない(事実婚で子どもあり)」(サ)「男同士や女同士の結婚も、法律で認められるべきだ(同性婚)」(シ)「結婚は、してもしなくてもどちらでもかまわない(結婚するしないの自由)」(ス)「親がふたりそろっていなくても、子どもを産んだり育てたりしてかまわない(非婚で子どもあり)」の 13 項目である。モデル 1 以降、これらの説明変数を一つずつ投入した(表 2-1、表 2-2、表 2-3)。可能な限り多くの回答数を確保するため、「子どもへの接し方や教育方針について」「家事のやり方や分担について」「お金の使い方など家計の問題について」の 3 つの指標それぞれについて、6(そのような問題が起こる機会はない)の回答者は省いて分析した。

表1-1

## 記述統計

	女性					男性				
	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
夫婦間勢力 (教育方針)	359	1	5	2.30	.814	303	1	5	3.34	.914
性生活不満足度	359	1	4	2.19	.691	303	1	4	2.19	.813
夫婦関係全体不満足度	359	1	4	1.93	.739	303	1	4	1.71	.692
家族観										
男性は外、女性は家庭	359	1	4	2.92	.885	303	1	4	2.98	.910
子どもが3歳までは専業主婦	359	1	4	2.75	1.015	303	1	4	2.68	1.023
家族を養うのは男性の役割	359	1	4	2.47	1.007	303	1	4	2.27	.962
事実婚	359	1	4	2.55	1.007	303	1	4	2.68	1.052
子どもなし夫婦でもよい	359	1	4	1.96	.958	303	1	4	2.31	1.011
離婚してもよい	359	1	4	2.23	.891	303	1	4	2.50	1.013
高齢の親と同居	359	1	4	2.95	.836	303	1	4	2.86	.854
高齢の無収入の親の扶養	359	1	4	2.67	.906	303	1	4	2.51	.949
寝たきりの親の介護	359	1	4	2.67	.908	303	1	4	2.43	.907
事実婚で子どもあり	359	1	4	2.55	.999	303	1	4	2.52	1.013
同性婚	359	1	4	1.92	.828	303	1	4	2.19	.905
結婚するしないの自由	359	1	4	1.78	.878	303	1	4	2.03	.947
非婚で子どもあり	359	1	4	2.17	.912	303	1	4	35.22	574.300

表1-2

## 記述統計

	女性					男性				
	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
夫婦間勢力 (家事)	396	1	5	2.21	.861	328	1	5	3.49	.961
性生活不満足度	396	1	4	2.22	.722	328	1	4	2.19	.811
夫婦関係全体不満足度	396	1	4	1.91	.735	328	1	4	1.71	.704
家族観										
男性は外、女性は家庭	396	1	4	2.92	.901	328	1	4	2.98	.917
子どもが3歳までは専業主婦	396	1	4	2.72	1.017	328	1	4	2.69	1.015
家族を養うのは男性の役割	396	1	4	2.48	1.012	328	1	4	2.28	.975
事実婚	396	1	4	2.52	1.010	328	1	4	2.65	1.067
子どもなし夫婦でもよい	396	1	4	1.96	.967	328	1	4	2.29	1.023
離婚してもよい	396	1	4	2.23	.898	328	1	4	2.48	1.023
高齢の親と同居	396	1	4	2.91	.831	328	1	4	2.84	.855
高齢の無収入の親の扶養	396	1	4	2.65	.906	328	1	4	2.48	.958
寝たきりの親の介護	396	1	4	2.64	.918	328	1	4	2.41	.921
事実婚で子どもあり	396	1	4	2.50	1.020	328	1	4	2.47	1.022
同性婚	396	1	4	1.90	.829	328	1	4	2.16	.900
結婚するしないの自由	396	1	4	1.77	.876	328	1	4	2.01	.943
非婚で子どもあり	396	1	4	2.13	.909	328	1	4	32.67	551.982

表1-3

## 記述統計

	女性					男性				
	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
夫婦間勢力 (家計)	357	1	5	2.60	.954	331	1	5	3.15	1.093
性生活不満足度	357	1	4	2.19	.684	331	1	4	2.19	.808
夫婦関係全体不満足度	357	1	4	1.93	.739	331	1	4	1.70	.703
家族観										
男性は外、女性は家庭	357	1	4	2.91	.884	331	1	4	2.98	.918
子どもが3歳までは専業主婦	357	1	4	2.75	1.014	331	1	4	2.68	1.018
家族を養うのは男性の役割	357	1	4	2.46	1.007	331	1	4	2.28	.971
事実婚	357	1	4	2.55	1.006	331	1	4	2.65	1.069
子どもなし夫婦でもよい	357	1	4	1.96	.953	331	1	4	2.29	1.021
離婚してもよい	357	1	4	2.23	.893	331	1	4	2.49	1.019
高齢の親と同居	357	1	4	2.94	.834	331	1	4	2.85	.851
高齢の無収入の親の扶養	357	1	4	2.66	.903	331	1	4	2.48	.954
寝たきりの親の介護	357	1	4	2.66	.905	331	1	4	2.41	.918
事実婚で子どもあり	357	1	4	2.54	.998	331	1	4	2.47	1.022
同性婚	357	1	4	1.91	.822	331	1	4	2.16	.899
結婚するしないの自由	357	1	4	1.78	.879	331	1	4	2.02	.942
非婚で子どもあり	357	1	4	2.17	.908	331	1	4	32.40	549.475

## 4.2 夫婦間の勢力関係が家族観から受ける影響

家族観が夫婦間勢力に及ぼす影響について、まず女性回答者についてみる。

### (ア)子どもへの接し方や教育方針について

性生活の不満足度と夫婦関係全体の不満足度については、いずれも有意な影響度はみられなかった。家族観については、男性は外で働き、女性は家庭を守るべきであるという意見に消極的であるほど、家族を経済的に養うのは男性の役割だという意見にも消極的であるほど、夫婦間において勢力が弱く、配偶者の意見が通り自分の意見が通らないという結果が得られた。また、男同士や女同士の結婚も、法律で認められるべきだという意見には、積極的な女性ほど夫婦間における勢力が弱い傾向があるという結果も得られた( $p<0.1$ )。

### (イ)家事のやり方や分担について

性生活の不満足度と夫婦関係全体の不満足度については、いずれも有意な影響度はみられなかった。家族観については、男性は外で働き、女性は家庭を守るべきであると思っていないほど、家族を経済的に養うのは男性の役割だと思っていないほど、親が寝たきりなどになった時、子どもが介護するのは当たり前のことだと思っていないほど、夫婦間において勢力が弱い傾向があるという結果も得られた( $p<0.1$ )。

### (ウ)お金の使い方など家計の問題について

性生活の不満足度と夫婦関係全体の不満足度については、いずれも有意な影響度がみられた。性生活に不満足な女性ほど、お金の使い方など家計の問題についての夫婦間における勢力が弱いという結果が得られた。さらに、夫婦関係全体に満足している女性ほど、お金の使い方など家計の問題についての夫婦間における勢力が弱いという結果も得られた。

家族観については、夫婦は、お互いの同意があれば、入籍しなくてもかまわないと思っている女性ほど、お金の使い方など家計の問題についての夫婦間における勢力が弱いという結果が得られた。さらに、結婚しても、相手に満足できないときは離婚すればよいと思っているほど、年をとって収入がなくなった親を扶養するのは、子どもの責任だと思っているほど、婚姻届けを出していないカップルでも、子どもを産んだり育てたりしてかまわないと思っているほど、お金の使い方など家計の問題についての夫婦間における勢力が弱いという傾向がみられた ( $p<0.1$ )。

次に、家族観が夫婦間勢力に及ぼす影響について、男性回答者についてみてみよう。

### (ア)子どもへの接し方や教育方針について

夫婦関係全体の不満足度については、有意な影響度はみられなかったが、性生活に不満足な男性ほど、子どもへの接し方や教育方針についての夫婦間勢力が弱い傾向があった。また、男性は外で働き、女性は家庭を守るべきであると思っていないほど、子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念すべきだと思っていないほど、子どもへの接し方や教育方針についての夫婦間勢力が弱い傾向があった ( $p<0,1$ )。結婚しても、必ずしも子どもをもつ必要はないと思う男性ほど、子どもへの接し方や教育方針についての夫婦間勢力が弱いという有意な影響度がみられた。

### (イ)家事のやり方や分担について

夫婦関係全体の不満足度については影響度がみられなかったが、性生活の不満足度については、不満足なほど家事についての夫婦間勢力が弱いという結果がみられた。また、家族観については、結婚しても、必ずしも子どもをもつ必要はないと思う男性ほど、夫婦間において勢

力が弱いという結果が得られた。結婚はしてもしなくても、どちらでもかまわないと思う男性ほど、夫婦間において勢力が弱い傾向があるという結果も得られた( $p<0.1$ )。

(ウ)お金の使い方など家計の問題について

お金の使い方など家計の問題については、性生活の不満足度の夫婦間勢力に対する有意な影響度はモデル5（子どもなし夫婦でもよい）以外ではみられなかった。夫婦関係満足度の夫婦間勢力に対する有意な影響度はみられなかった。また、結婚しても、必ずしも子どもを持つ必要はないと思う男性ほど、夫婦間において勢力が弱いという結果が得られた。さらに、男同士や女同士の結婚も、法律で認められるべきだと思う男性ほど、夫婦間において勢力が弱いという結果が得られた。

表2-1 夫婦間の勢力関係(教育方針)と家族観に関する重回帰分析

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5	モデル6	モデル7	モデル8	モデル9	モデル10	モデル11	モデル12	モデル13
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
性生活不満足度	.015 (.133.)	.013 (.140*)	.020 (.138*)	.023 (.135.)	.023 (.134.)	.025 (.130.)	.028 (.136*)	.026 (.134.)	.028 (.134.)	.024 (.136.)	.030 (.128.)	.026 (.134.)	.025 (.136*)
夫婦関係全体不満足度	-.056 (.071)	-.054 (.062)	.004 (.067)	.070 (.065)	-.067 (.062)	-.062 (.073)	-.068 (.070)	-.066 (.066)	-.070 (.067)	-.067 (.066)	-.063 (.070)	-.068 (.061)	-.067 (.064)
男性は外、女性は家庭	.016*** (.111.)												
子どもが3歳までは専業主婦		.070 (.094.)											
家族を養うのは男性の役割			.160** (.085)										
事実婚				-.034 (-.009)									
子どもなし夫婦でもよい					-.027 (.138*)								
離婚してもよい						.030 (.062)							
高齢の親と同居							-.051 (.074)						
高齢の無収入の親の扶養								-.050 (.080)					
寝たきりの親の介護									-.037 (.049)				
事実婚で子どもあり										.018 (-.000)			
同性婚											-.101. (-.085)		
結婚するしないの自由												.019 (-.068)	
非婚で子どもあり													.003 (-.016)
R <sup>2</sup>	.031 (.050)	.008 (.041)	.028 (.040)	.005 (.033)	.004 (.050)	.004 (.037)	.006 (.038)	.006 (.039)	.005 (.035)	.004 (.033)	.001 (.040)	.004 (.037)	.003 (.033)
Adj-R <sup>2</sup>	.023 (.035)	-.000 (.032)	.020 (.030)	-.004 (.023)	-.004 (.040)	-.004 (.027)	-.003 (.028)	-.003 (.029)	-.004 (.025)	-.005 (.023)	.005 (.030)	-.005 (.027)	-.005 (.023)
N	359	359	359	359	359	359	359	359	359	359	359	359	359
	303	303	303	303	303	303	303	303	303	303	303	303	303

( ) は男性

P<0.001

P<0.01

P<0.05

P<0.1



表2-2 夫婦間の勢力関係(家事)と家族観に関する重回帰分析

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5	モデル6	モデル7	モデル8	モデル9	モデル10	モデル11	モデル12	モデル13
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
性生活不満足度	.016 (.162*)	.011 (.160*)	.017 (.160*)	.014 (.161*)	.023 (.164*)	.026 (.162*)	.018 (.163*)	.020 (.161*)	.015 (.162*)	.018 (.162*)	.023 (.158*)	.021 (.162*)	.023 (.162*)
夫婦関係全体不満足度	-.036 (.057)	-.038 (.570)	.046 (.057)	.026 (.057)	.027 (.049)	.034 (.056)	.029 (.058)	.028 (.057)	.033 (.056)	.030 (.057)	.033 (.060)	.028 (.046)	.028 (.055)
男性は外、女性は家庭	.098. (.006)												
子どもが3歳までは専業主婦		.065 (-.011)											
家族を養うのは男性の役割			.099. (-.040)										
事実婚				-.075 (.003)									
子どもなし夫婦でもよい					-.019 (.123*)								
離婚してもよい						.046 (-.004)							
高齢の親と同居							.055 (.046)						
高齢の無収入の親の扶養								.033 (-.027)					
寝たきりの親の介護									.087* (-.036)				
事実婚で子どもあり										-.037 (-.016)			
同性婚											-.080 (-.064)		
結婚するしないの自由												-.050 (-.096.)	
非婚で子どもをあり													-.001 (-.023)
R <sup>2</sup>	.011 (.040)	.006 (.039)	.012 (.041)	.008 (.040)	.002 (.055)	.004 (.040)	.006 (.042)	.003 (.040)	.009 (.041)	.003 (.040)	.008 (.044)	.004 (.049)	.001 (.040)
Adj-R <sup>2</sup>	.004 (.030)	-.002 (.031)	.004 (.032)	.000 (.031)	-.005 (.046)	-.004 (.031)	-.003 (.033)	-.005 (.031)	.002 (.032)	-.004 (.031)	.000 (.035)	-.003 (.040)	-.006 (.031)
N	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)	396 (328)

( ) は男性

P<0.001

P<0.01

P<0.05

P<0.1

表2-3 夫婦間の勢力関係(家計)と家族観に関する重回帰分析

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5	モデル6	モデル7	モデル8	モデル9	モデル10	モデル11	モデル12	モデル13
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
性生活不満足度	.172** (.006)	.175** (.004)	.171** (.007)	.167** (.006)	.168** (.008**)	.172** (.011)	.172** (.010)	.173** (.006)	.173** (.007)	.163** (.010)	.123** (.000.)	.171** (.007)	.172** (.008)
夫婦関係全体不満足度	.151* (.108)	-.155* (.107)	-.146* (.106)	-.163** (.108)	-.153* (.099)	-.168** (.099)	-.151* (.109)	-.149* (.106)	-.153* (.106)	-.148* (.107)	-.150* (.112.)	-.151* (.097)	-.151* (.102)
男性は外、女性は家庭	.004 (.407)												
子どもが3歳までは専業主婦		-.016 (-.037)											
家族を養うのは男性の役割			.035 (-.005)										
事実婚				.039* (.018)									
子どもなし夫婦でもよい					-.085 (-.144.)								
離婚してもよい						-.095. (-.039)							
高齢の親と同居							.001 (.090)						
高齢の無収入の親の扶養								-.089. (-.006)					
寝たきりの親の介護									-.198 (-.035)				
事実婚で子どもあり										-.099. (-.069)			
同性婚											-.032 (.141*)		
結婚するしないの自由												-.027 (-.089.)	
非婚で子どもをあり													-.010 (-.052)
R <sup>2</sup>	.024 (.014)	.024 (.013)	.025 (.012)	.039 (.012)	.032 (.033)	.033 (.014)	.024 (.020)	.032 (.012)	.025 (.013)	.034 (.017)	.025 (.032)	.025 (.020)	.024 (.015)
Adj-R <sup>2</sup>	.016 (.005)	.016 (.004)	.017 (.003)	.031 (.003)	.023 (.024)	.025 (.005)	.016 (.011)	.024 (.003)	.016 (.004)	.026 (.008)	.017 (.023)	.017 (.011)	.016 (.006)
N	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)	357 (331)

( ) は男性

P<0.001

P<0.01

P<0.05

P<0.1

## 5. 夫婦の勢力関係と子どもとの関わり

### 5.1 分析方法と分析に用いる変数

NFRJ18 ver.2.0 のデータを用いて、分析対象を若年層（28～47 歳）のうち子を持つふたり親、回答数 1248 について、重回帰分析を行なった。

① 従属変数を「しつけや子どもとの関わり」として、若年層：r28\_01～06 を、会話、心情理解、虐待傾向の 3 つに分けた。1 つ目は、会話として（ア）の子どもとよく話すことを 1、2 つ目は、心情理解として（カ）の子どもの気持ちや考えを理解しようとするのを 2、3 つ目は、虐待傾向として、（イ）の子どもを無視する（ウ）の手や体をたたいて叱る（エ）の怒って子どもを押し入れや浴室に閉じ込めたり、家の外（ベランダなど）に出す（オ）の子どもが傷つくようなことを言うことを合算（ $\alpha=.638$ ）して 3 とした。

② コントロール変数として、性別、年齢、学歴、世帯年収、夫婦関係についての「意見の通りやすさ」（夫婦の勢力関係）を用いた。学歴については、「中卒と高卒」を合算して 1、「専門学校・短大卒」を合算して 2、「大卒・院卒」を合算して 3 とした。夫婦間での力の弱さ：自分の意見の通りにくさについては、（ア）の子どもへの接し方や教育方針についてと、（イ）の家事のやり方や分担について、（ウ）のお金の使い方など家計の問題についてのすべてを合算（ $\alpha=.822$ ）した。（1“自分の意見”～5“配偶者の意見”）

③ 説明変数として、結婚生活満足度の中の、性生活満足度と夫婦関係全体満足度の二つを、前述の通り用いた。数字が大きくなるほど不満足ということになるため、数字を逆転させずに分析し、満足度ではなく不満足度とした。

結婚生活満足度の選定理由を補足しておきたい。「夫婦関係」の定義は、「夫婦間の精神面での支え・性生活・話し合い」と全体的なこととする場合と、「夫婦間の性生活」に限る場合があり曖昧である。そして、従来の「夫婦関係満足度」の測定についても、概念上の定義やその測定単位・方法が必ずしも統一的に確立されているわけではなく、夫婦間満足度、結婚幸福度など類似の概念が存在する。他にも、結婚満足度、夫婦関係満足度（感）、結婚幸福度感、配偶者満足度、婚姻満足度などさまざまな名称が測定の指標として用いられている（木下 2004）。

NFRJ18 においては、「夫婦関係全体」についての満足度と、「性生活」についての満足度と分けて二つの指標が用いられている。結婚生活満足度のなかでも、性生活に満足しているかどうかは、調査する側も答える側も扱いにくい問題と思われるが、NFRJ18 では、ダイレクトに「性生活満足度」についての測定の指標が設けられたので分析に用いることが可能となった。

表3 記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
女性ダミー	1248	0	1	.5304	.49927
年齢	1248	28	47	39.01	5.719
学歴	1240	1	3	1.9927	.82384
世帯年収	1087	1	12	7.68	1.860
夫婦間勢力の弱さ	711	3	15	8.3741	2.70172
性生活不満足度	777	1	4	2.19	.758
夫婦関係全体不満足度	817	1	4	1.82	.735
子どもによく話しかける	790	1	4	1.26	.585
子どもを理解する	789	1	4	1.53	.741
虐待傾向	779	4	16	14.6611	1.46270

## 5.2 子どもとの関わりと虐待傾向

「子どもによく話しかける」についても「子どもを理解する」についても、「虐待傾向」についても、女性の方が多いという結果が得られた。特に、「子どもによく話しかける」と「子どもを理解する」については、統計的にとても有意に女性の方が多いという結果が得られた。

親の年齢が上がるほど、夫婦の勢力関係で弱い人ほど、子どもに話しかけない。結婚生活において、性生活に不満があるほど、子どもに話しかけないし、夫婦関係全体に不満があるほど、より有意に子どもに話しかけないという結果が得られた。しかし、性生活の不満は子どもの心情理解には無関係であった（表4 モデルA-1、A-2）。

また、親の年齢が上がるほど、子どもの気持ちや考えを理解しない。学歴が高いほど、子どもの気持ちや考えを理解するという結果が得られた。しかし、夫婦間勢力の弱さや性生活の不満足度は子どもの心情理解には無関係であった。また、夫婦関係全体に不満があるほど、より有意に子どもの心情を理解しないという結果が得られた（表4 モデルB-1、B-2）。

虐待傾向についても、女性の方が虐待リスクが高い。親の年齢が上がるほど有意に虐待傾向が低いという結果が得られた。また、夫婦の勢力関係で弱い人や、夫婦関係全体に不満の人は、虐待リスクがあることもわかった（ $p<0.1$ ）。しかしながら、性生活の不満足度は虐待傾向とは無関係であった（表4 モデルC-1、C-2）。

表4 子どもとの関わりに関する重回帰分析

	モデルA-1	モデルA-2	モデルB-1	モデルB-2	モデルC-1	モデルC-2
	子どもによく話しかける		子どもを理解する		虐待傾向	
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
女性ダミー	-.179***	.197***	-.182***	-.215***	-.123*	-.130**
年齢	.147***	.125**	.135**	.117**	.163***	.176***
学歴	-.035	-.019	-.102*	-.089*	.060	.043
世帯年収	-.064	-.590	.007	-.002	.025	.015
夫婦間勢力の弱さ	.111*	.116*	-.024	-.029	.091.	.076
性生活の不満足度	.100*		.058		-.021	
夫婦関係全体の不満足度		.141***		.162***		-.760.
R <sup>2</sup>	.109	.112	.062	.084	.074	.080
Adj-R <sup>2</sup>	.100	.103	.052	.075	.064	.071
N	790	790	789	789	779	779
			P<0.001***	P<0.01**	P<0.05*	P<0.1.

## 6. 考察

第1に、夫婦間勢力に影響を及ぼす家族観の分析からは、女性回答者、男性回答者ともに特筆すべき点が見出された。女性回答者については、男性は外で働き、女性は家庭を守るべきであるという意見や、家族を経済的に養うのは男性の役割だという意見に消極的であるほど、教育や家事などの問題について自分の意見がとおりにくく勢力が弱いという結果である。これは、女性自身が勢力が弱いという回答をしているということであり、ジェンダー意識が弱いからこそ、現実のジェンダー格差や自身の勢力の弱さに気づき受容できないことのあらわれではないだろうか。また、男性回答者については、今回の分析では、結婚しても必ずしも子どもを持つ必要もなく、同性婚も認められるべきだと思うジェンダー意識の弱い男性ほど、家計の問題についての夫婦間勢力が弱いという結果が得られたことにも注目したい。

第2に、夫婦間勢力に影響を及ぼす結婚生活満足度の分析からは、夫婦間勢力の中でも、お金の使い方など家計については、性生活の不満足度と夫婦関係全体の不満足度の、いずれも有意な影響度がみられた。性生活に不満足な女性ほど、夫婦関係全体に満足している女性ほど、家計の問題についての夫婦間における勢力が弱いという結果が得られた。仮説に示した、夫婦の勢力関係で弱い女性のなかで、夫婦関係の不満が少ない女性ほど、ジェンダー規範を身につけているということと合致する部分がある。家計の問題は、外で働く男性の意見がとおりにやすいのは、自然なことで解せられる。大きな決断は男性に任せるというジェンダー規範のあらわれであるともいえよう。家計の問題は、これまでの先行研究から多くの知見があるように、また、松本（2006）の研究では、夫が家庭内の経済基盤を握っていると、夫の家庭内におけるジェンダー意識が再生産されるのではないかと分析されている。

男性の性生活の不満足度は家計の問題についての夫婦間勢力には有意な影響度がなかったが、性生活に不満足な男性ほど、教育方針や家事についての夫婦間勢力が弱かった。教育方針や家事についての勢力が弱いということは、妻の意見を優先しているといえる。今回の調査では、夫婦カップルでの性生活の満足度を調査したものではないので、夫が一方的に性生活に不満足なのかどうかはわからないが、性生活に不満足ということは、性生活における勢力も弱く、妻を優先しているのかもしれない。

男性のジェンダー意識が男性の勢力に影響していることを鑑みれば、男性のジェンダー意識の強さは、男性の性生活における勢力と妻の性生活不満足度に大きく関連するかもしれない。

第3に、夫婦間勢力と子どもとの関わりについては、虐待傾向は、性生活の不満足度よりも、夫婦の勢力関係で弱い人や夫婦関係全体に不満足な人は、虐待リスクがあることがわかった。これは、先行研究の夫婦関係満足度が低いほど虐待傾向が強い（永井 2006）という知見とも合致する結果である。夫婦の勢力関係において相手の勢力が強い場合、自分よりも弱い立場の子どもに力が向かい虐待リスクになるという仮説とも合致する結果である。また、子どもによく話かける、子どもの気持ちや考えを理解するなど、子どもと良好な関わりをするかどうかは、夫婦の勢力関係や夫婦関係全体の不満足度が統計的に有意に影響することが示唆され、仮説とも一致した。

今後の課題として、性生活に不満な男性が教育方針や家事についての夫婦間勢力が弱いことや、性役割分業に反対の意見を持つ女性が、教育方針や家事についての夫婦間勢力が弱いことについては、今後、分析方法を検討する余地がある。

#### [備考]

NFRJ18 の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。

(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

#### [文献]

Cummings,E.M.,Davies,P.T.,& Campbell,S.B.,2006, *Developmental psychopathology and family process:Theory,research,and implications*.NY:The Guilford Press.(=菅原ますみ (監訳) 2006. 「発達精神病理学——子どもの精神病理の発達と家族関係」 ミネルヴァ書房).

ゲルダ・ラーナー, 奥田暁子訳, 1996, 『男性支配の起源と歴史』 三一書房, 274-279.

Greenstein,Theodore N.,1996, “Gender Ideology and Perceptions of Fairness of the Division of Household Labor;Effects on Marital Quality,” *Social Force*,74(3),1029-1042.

平山順子・柏木恵子,2004, 「中年期夫婦のコミュニケーション・パターン——夫婦の経済生活および結婚観との関連」『発達心理学研究』 15:89-100.

堀口美智子, 2006, 「乳児をもつ親の夫婦関係と養育態度」『家族社会学研究』 17 (2) :68-78.

木下栄二,2004, 「結婚満足度を規定するもの」 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』 東京大学出版会, 277-292.

Komter.A.1989.Hidden Power in Marriage, *Gender and Society*.3(2):187-216.

李基平,2008, 「夫の家事参加と妻の夫婦関係満足度——妻の夫への家事参加期待とその充足度に注目して」『家族社会学研究』 20 (1) :70-80.

松本訓枝,2006, 「夫の家事・育児参加は妻の夫婦関係満足度を高めるか?——雇用不安定時代における家事・育児分担のゆくえ」 西野理子・稲葉昭英・嶋崎尚子編『第2回 家族についての全国調査 (NFRJ03) 第2次報告書 No.1 夫婦、世帯、ライフコース』 日本家族社会学会 全国家族調査委員会.

永井暁子,2006, 「夫婦関係と養育態度」 澤口恵一・神原文子編『第2回 家族についての全国調査 (NFRJ03) 第2次報告書 No.2 親子、きょうだい、サポートネットワーク』 日本家族社会学会 全国家族調査委員会.

中板育美・佐野信也, 2012, 「産後の母親のうつ傾向を予測する妊娠期要因に関する研究——子ども虐待防止の視点から」『小児保健研究』 71 (5) :737-747.

永瀬圭,2015, 「夫の夫婦関係満足度の規程要因に関する分析——夫婦の社会経済的地位の組み合わせに注目して」『季刊家計経済研究』 107:64-71.

孫詩或,2017, 「夫妻の権力関係——権力の過程に焦点を当てて」 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 129,1-15.

末盛慶, 1999, 「夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足度」『家族社会学

研究』 11:71-82.

高橋有里, 2007, 「乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因」『岩手県立大学看護学部紀要』 31-41.

山崎さゆり, 2003, 「夫婦就寝形態について——住居における個人の場との関わりで」『人間福祉研究』 5:99-110.

善積京子・高橋美恵子, 2000, 「夫婦の権力関係の日本・スウェーデン比較研究」『追手門学院大学人間学部紀要』 9:57-79.



Effects of Marital Power Relationships on Relationships with  
Children

—From the Perspective of Gender Consciousness—